
精神分析の深みへ

藤山直樹著

金剛出版, A5判 240頁, 4,180円, 2025年11月刊

(こども・思春期メンタルクリニック) 山崎孝明

本書は、本邦を代表する精神分析家・藤山直樹の『精神分析という営み』(2003), 『続・精神分析という営み』(2010), 『精神分析という語らい』(2011)に続く、「第四主著」である——と出版社HPでは紹介されている。

だが、藤山のなかでは本書の位置づけはこれまでの三冊とは異なるらしい。というのも、三作はあくまで「パートタイムの精神分析家」(もしくは候補生)として書いたものであり、それに対して本書は「フルタイムの精神分析家」として編纂したものだからだ。ここに藤山の強調点がある。

『営み』で鮮烈な著者人生を歩み始めた藤山の最大の特徴を、美しい事例描写に見る読者も少なくないだろう。私もそうである。しかし本作は、これまでの三作にくらべて、事例の記述は少ない。それは彼が「パートタイムの分析家」から「フルタイムの分析家」へと変貌を遂げたことと無関係ではない。

三作が出版されたころ、つまり藤山が「パートタイムの分析家」であったころ、私はちょうど上智大学で藤山のゼミ生だった。だから私は大学教員としての藤山をよく知っている。藤山は、教員としても精神分析家としての姿を見せようと努めていた(と第4章でも書かれている)。そのころ、藤山は心理・精神医学業界に、そして社会に、精神分析というものを根づかせようとしていたように思う。その方法こそが、心動かす、劇的な事例記述だった。

しかし、それらのケースの多くは週一回のものだった。精神分析ではなかったのだ。そして実は、週四回の精神分析では、週一回のように劇的なことは起こりづらく、より静かな経過をたどる。本書でもそ

う述べられている。それこそが、本書で事例よりも抽象的で原理的な思索に紙幅が割かれている所以であろう。ここで藤山は、まさに「精神分析の深みへ」向かっている。

本書において、藤山はもう、精神分析を宣伝しようとはしていない。誰かにに向けて書いていない。自身の思索を深めるために書いている。私にはそう見える。

本書では、三作に底流していた藤山のサービス精神は影を潜めている。淡々と、事実と思考を説得力を持って示すことに注力されている。それは彼が、「私たちが私たち自身であることこそが精神分析家であることである、という地点に向かって私たちは精神分析家になり続けるのである」と述べていることと相似形をなしている。藤山は、ただ藤山自身であろうとしている。それが「フルタイムの精神分析家」である、ということなのだろう。

ゆえに本書は、誤解を恐れずに言えば、「読み物」としては三作ほどは面白くないかもしれない。私をふくめた、精神分析家ではない、精神分析家を目指していない読者には、本書は速く感じられるかもしれない。三作のうち特に『営み』などでは、読者には藤山が同一化対象として感じられたのではないかと思う(本書に3本の関連論文が収載されている「平行移動問題」を藤山が提起したおかげで、それが幻想であったことも、いまや私たちは知っている)。しかし、本書は違う。もはや彼の書いていることは、一般的な心理／精神療法家の臨床とは明らかな乖離がある。いや、乖離は以前からあったのだが、その前提が隠蔽されることなく屹立している。

本書は、藤山と私たちは違うという事実を、否定なしに突きつけてくる。それは私たちに痛みをもたらすだろう。だが異なる存在からこそ学ぶことができるのだということが、精神分析の教えていることだと私は思う。その意味で、本書は私たちに多くのことを、痛みと共に学ばせてくれるだろう。そうして、藤山が藤山になっていくように、私たちも私自身になっていく、そのための力を与えてくれる書である。多くの方に読まれることを願う。